

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40

JAPAN

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40

4

3

2

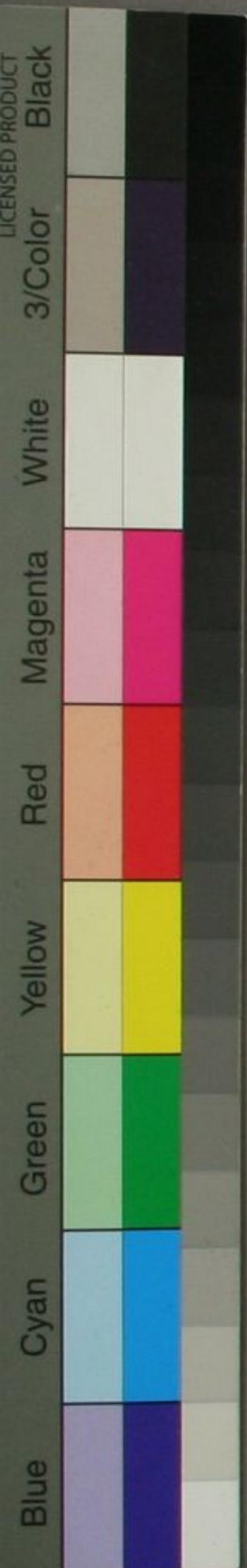
1

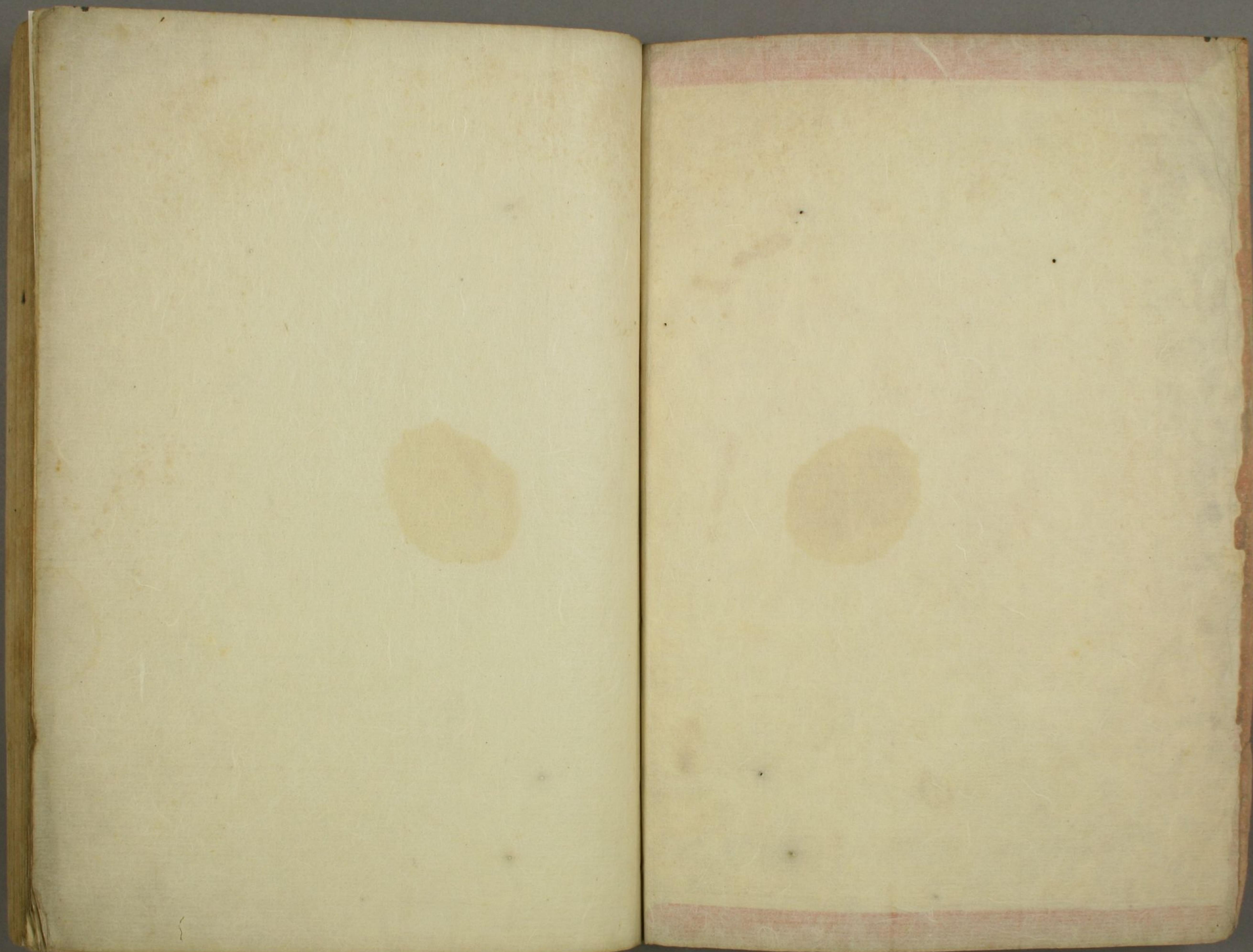
0

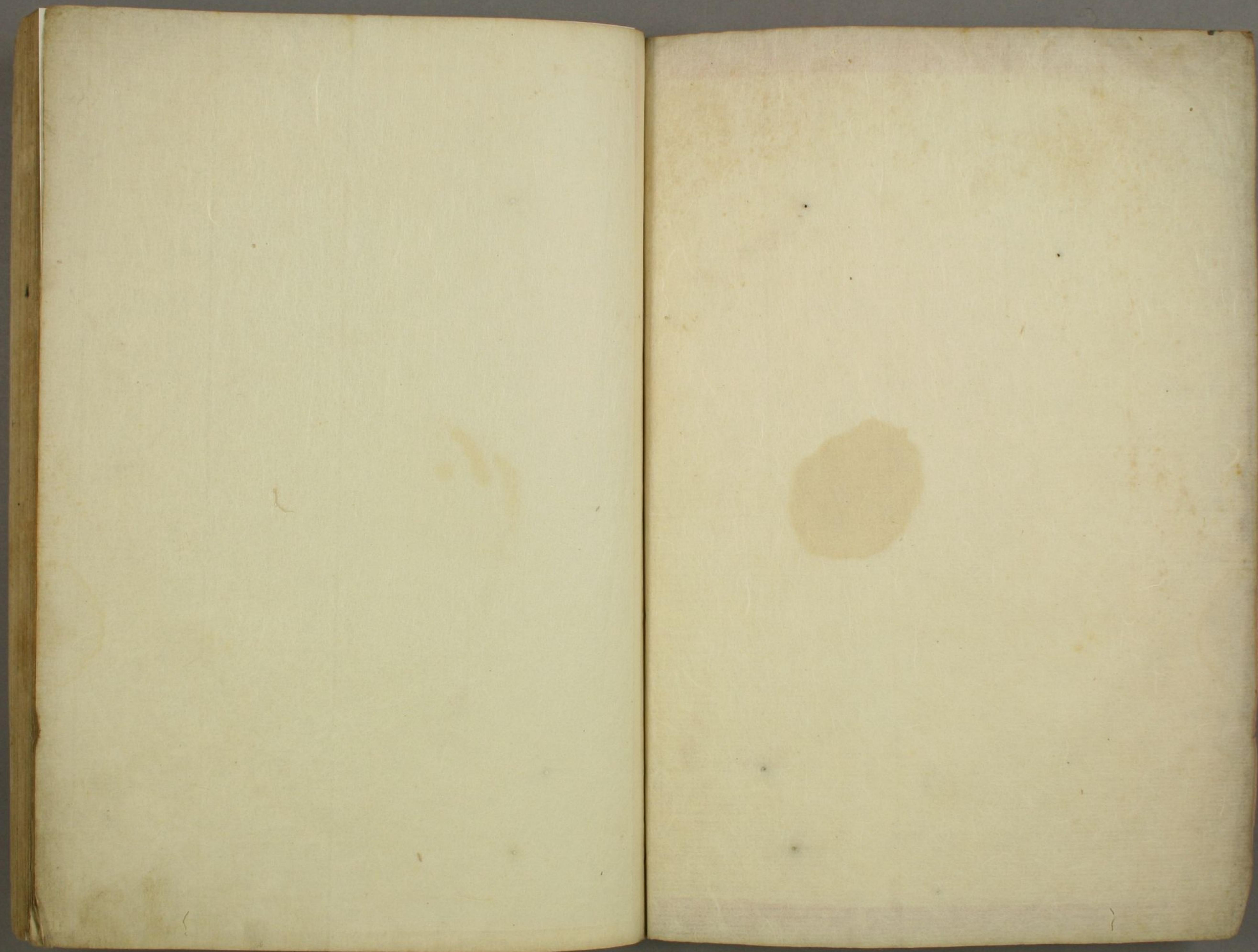
中村俊定文庫

文庫 18

29









有人の云春夏秋をよつまで多歎す本はうり
あ彌嘉書の傳うりとれと寄れ題のすにうりて
後白の道をよかれて初まの公甘越とれが空
おこにめぐらし久末井戸ひそく石刃のあわく
書ほくへとみよ草の下にせひづきとれゝ鴨川
の流の百首せひくうめてたまのはや斗とうく
と先ほくりゆがね押あられ心事とがどひく
うととすゆるやましげんちの去風うね



かくはうへもとてよし申是こうりみゆふを
なまへー只百旗のそーめるもひつゆもんす
てうへもあきよたあくまくは類と離れ時言時宣ふ
あしけつ教をすばら教るふんと色きよもと
うもゆかづきこしめやはくもとくに是はうるす
きやれりやりいわる越ぬと五くすまくい古東
じゆるりゆるい源流——姉立てお傳りしつ
事よりてんさくは風雅集の序もあらはせん
まくさんととくは甚くもくじ詞ことやうもくは

主徳以心——詔歌いたれ先く強きはなづく
正と書むこと誠うれび入本抄も行のまとく写
得——の真草にもととてと有りや万葉を不及す
中庸正風よけきの列——お歌うとく——はく
日——春——の吉原かとほもくへよ秀逸をのどん
ふうや侍——とせきとくやくと葉姓くわせと退
居の事も出来ぬ——十位の僕心教僧那の書うる
にと教る——和音北表頃の——風情ハ一概也
よくもゆかず其理叶へまくわ万葉を抄く新續本
にと教る——一代——のは情うもく——おけ書のと

の爲成事一沈黙やはゞことを氏上トモ
且上モ生キヒと互フハシミトミスルノ詞のセト
チニシテテモテ唐ニシテテ也ハリテ達藝
ハヤトアシテテナリ塔モ此モトキシセヒイミカ
はあモ不内モ念の事モタクモテ此モハ國の風
俗モシテ大本経ヘシト後生也タメシテ
伊奈ハ其業多キシテニ人情考トキモハシム
多モテ自理トシテニヤサシ人情古風なりハソ
シモテアリシテ色キヨウヒトセキハシム
やまれ能波の事モヒトテアシテハ計画耳

なまくらへんせつもとすむち東北假名書もと
うすはゆる日影と引くとよしもとをぬかわぐ
を以て書きんあゆくへやまき氣のつか経て哀傷
離ふ生名不人教神祇下の教る其席より
てふづひもくや経ては月は枕名のされかね
至りときはせさんくわゆまくて死也夜云たまほ
心くよ代の春万代のねりりふい限へてひる極
め事にちるひくゆくとくにあきれく
あまへて是限のふねくや和哥に面中吟東東
紀とちるもとまへて哀傷の多ひもと

後衣うるゝつゆはお色うへんあせじとま
參儀うねやと入をもすをほん融あひ教るハ
捨り内法玉とてお取しのと向平一再三と
引き立めあり相の本立と尋へ一車の後白は
さくさく例がきりや櫻古のあ風石額かく云と
きあお風くで愛白と意のうらうちを
えうちもむ行ひのとふ風色のひねよんを
色く名不の昔のいとより列の事わる
一又上風の人母りかくよつめて仕事す候
毛い婦なるとみや細く之内へ養るこゝもあそ

おまくさくにほんとくとく者と有事えども
用持までー又櫻古のあ特以てすれとけりま
せくゆとくさくとくとくや 花の春うるふや吉聖
山も順すに多るや新舊能波集よへとたすく
教の教のあふひ多ひの追善經文を頃名号の達
歌のれぬりおとと嘗候信養の法玉れとまづ
つしひよ多ー神祇のゑのい事の法玉れ
身を毎年侍るのと又はお佑れせりや遷まづ
玉れと云時のとおととくとて從え成生と
下と發せりよるあるのゑのい事のとゆ

はすみゆきとくま
眼中とてちをま
喜びと心をもに書たらわすまひの限而
かくやつりかん風情をかほせりの爲
まよともとよけの爲めに先物を傳
えよき歩たりもやく
きよゆふつひとす、まされわあらまくとあ
るくと也遠く近く歩くそひゆうむの
種子性竹とはあまきのけゆとくらふ

春

一立春元日の数日あつてあらうかきよをし
年才内は立春ミツコ らえり 去年立ミツ 年に
しる事シテ ふ宗ムロ 又正月二日立春ミツコ 無事ムジ お立
しゆも事シテ は春宗ムロ 住リ すとケ絶カタマリ の立
うへん越ハタケ いと凡ハナシ くう人ヒト ひ自公ヒヨウ の立タチ もあから
立春ミツコ てとくわやめめれと不有也年ハシメ 内立春ミツコ
格ハタケ あひの立タチ 連歌ハタケ ひめ季ハタケ てかむ故实ハタケ ありあ
喜ハタケ ひえ日ハタケ とりと月ハタケ あそびと花ハタケ 一子日ハタケ 美菜
き日字ハタケ すと年ハシメ がきと酒ハタケ 及ハタケ まと梅春冰柳

強畫大黒月一時ふたりの如ひ立春より三月半
ひそひく風情みて一強畫二月あつてゆ
梅は旧年よりほどのあれせばはやうりへく
伊セオ語彼西對
春月の限母暁月梅のも翠もとを二月雪簾衣
とがよ清すゝ眼あり附毛也それと年にうちふよも
つまても速き春もうとれのめ候もひとが宗祇仕
きうり柄母限へん是ふよとかもととへ一よ廢書ま
梅もと又月一かく歎きと考るにわをぬま
工とみをすや春をハ花どものもはん人ふひ
墨のをほだまのまくらをひやさとよみうり雪盡

朗詠 搞在列
折梅花而掉頭
二月之雪落衣

残雪大黒月一時ふたり寂れどい立春より宵半
むとひく内情をへて残雪二月あつた乞う
梅の旧年より残り候るやうれせばは曳り去るや彼西對
春月の辰日曉月杓のも雪もとを二月雪暮衣
とひよ待り眼ありませしと奉てまつら

伊勢お語

山谷詩集第十六

山谷詩集第
次韻、高子勉

文集 白居易

押無氣力條先勸

卷之三

春入——低

詞花春
重之

春日井の野原の

卷之三

虚簷滴春從細草回とひなはよりれも暁月はま二月
の始のいわくもひまてひまえの柳は立春の詩の神無氣
力と化する。子春れどもりく春入枝條桺眼垂りも
あきとてめ春り。怪色あくにあくにあくにあくにあくに
二月やか十日斗の梅うつよきうよきうよきうよき
うよきと書たハルと是をもえて時がの化えとちくに
へまよや難よぬる雪蓑あり數種よひをせんぬすよ
若葉つむく。徳まため春に、仕立へてすアヒ
身身わくまやさく。ゆゑ月は二月のことをやと
ちよてやせと蓑ふ有のことをせんとて一却無事ね

何時と云別事わゆる事也。二月の下旬を既春にて
やあ即ち伊セアセの文錦の後より始と云ひ承
うきまことせられ。あまええ氣のはずとえんう題
白やりひやくとては。はよと敵の是よりもとを尾
純尾とは春事にてとめああく内にのゆは仕事の者
白にとおれ化例無き帰る燕。左哥柳。右が遠移。左
よあれりたる二月。右をかめある。右をじ。左を舊。右
あ魚を峰子鳥する。右が費。左の歌。右は人稀。左は
音。左は時。右を。左は人。右は音。場川百景。左
右は海鳥のけよ。峰子鳥とゆきり。右は。左は

二月の山中はすこへ一け所に停まることをせ
んとせり。山中はすこひもあせし。されどかて
毛道す。蝶は一生不得近梅花と庵人といひき
尋ねてはれまき、眼としゆく。うめのものも
内み殊とよあふやまく。時より其作のよほじ
壁を春ぬけむのうるえ修業。此時からそぞら
侍つゝもひゆまく。はなびらを。はなびらを
ふべ。茶室の教哥は座地す。はなびらを。はなびらを
はなびらを。はなびらを。はなびらを。はなびらを
はなびらを。はなびらを。はなびらを。

おはみの氣化の雨とはよまやからず
とれどもすれどもみゆきがくさ
きもとむはあくと再び一せき
幕本と卷よ木のち経ふを従すと人にうる
をきくと書ひにまの用にめをとやも
はゆ者するを春ゆて人内物へまのうれいの
まきへ一地の氣を乞ひけりま自分もくわ
きのか葉落ひ吹ひ梨雲躊躇あ後まつ大暑と
日をもむく椿の葉もやれをくみて春
たゆすや宵たり今ひまくもれや國有

因之日あとのお実被せめうるべし此處の内
上よりは躊躇したるやはせれんじゆく方安ら
為徳も魂かくちるやを

卷之二

立春

月の秋夜のよきあはれ
新月は秋おほむる
心致

卷之三

種を記す所の二葉より
ゆくやる神、ひくの相あ
をとよもとし一木を柏、か
立ててをとよもとしや穿内相あ
氣立きひのうりをとよもとれ
ひととよもとねをひりを立す處
めぐらす自立する行うる教事
唯左をとよもとよもとあれば
全

當

萬葉やとよもと事のあやうき 宗祇

八

うひよに柏くわいねともく宵柏

萬葉

少城のとつひくの萬葉の心教

殘書

き山の萬葉、やに同うる 賢盛
ねの葉はあやねりまくすけ
清きりよひまくすけるが 總持坊 行助
を教へゆく萬葉のかくすけ 宗長
残きるふいきよくうむく者のを 兼載
うてまくすけをゆるじゆく 肖柏

相原伊賀入道

新
ムの身せどしや名残を以て書
宗祇
消えて老ひ友庵と筆代書 全

梅

大内喜光良

新
行を極めしよりある間

政弘

日
極へよきやまとし年の樹 兼載
うやうれり川の樹のそれ 賢盛

柄つゝ匂いづける教義す頃

まほの傍まで二月す

柄く成同人よりや若のを 心致

余年の暮引みて聖年右ふの事

九

新
の香を匂ひやの樹 宗祇
ひくいきへ香ひく樹のむ 宗長
樹のよ白ときてみんがふ一 宗祇
白妙な樹もろき匂ひる 宗祇
樹うきえもとや袖の夕月取 全
あかにたすくの先は月取 全
柄うきだそれ匂ひる 宗祇
よりて知人をとぞやの萬 全
ゆききみ候を押し右れ樹 肖柏
神とく葉を匂ひ人樹のも 全

桺

萬葉ノツルハ富代柳宗祇
柳宗祇の春全
新風宗祇の柳全
宿長
宿新の柳新の柳新
宿新の柳新の柳新
宿新の柳新の柳新

多子

新
春宗祇の柳新の柳新
宗祇

十

ソラノ月奈翁全
追情歌冲全
喜全をたゞや面玉柳全
早嚴

紫智溫れちうとまくわ智溫か智溫

桺

誰智溫とせ智溫の待智溫人智溫せん春智溫れ智溫宗祇
桺智溫の智溫人智溫れ智溫宗祇
ア智溫て候智溫そそきに智溫れ智溫者智溫を智溫
さ智溫れや龜智溫の智溫ふ智溫山智溫桺智溫宗祇

行ひゆきあうの御花うど櫻 宗荔
まよす一枝ともふる花の色香ふ 兼載
山桜また都内花 まよす ち復
新毛よ春やくらぬふうせそ 櫻 行助
古日々とくまやまやねを櫻 通生
竹アリ多やゆも胡シロク 桜 宗祇
新竹をすせりこよき櫻 武田 宗祇
ふととて氣やくろの相星 宗祇
あ面壁くわくに是る行ハセ 宗元
考氣若ふ二あひのて、ト終 肖柏

新多や知づくわをうひまく や復
むわきよりひの消を相氣 宗祇
新竹アリ行よを帰相とくえ 心致
さくさくはうわおひゆふ全
大作まきを多作一作まつてすと
新日わきより行よをくわくわ 全
も一本うへぬ旅内御とくへ 箱庭
さくさく候をひちやうとくへ 宗祇
わゆよみたのをくふあはれ 祀助
白雲をくわくわに海の衣藏 肖柏

あむくとく書や花の鳥よす
新
うへ書れどもやうんこも書
花國をあみとあひすよ
新
を畫りて似てすよ
月のじよや花の春れを
月のしよや花の春れを
候ゆくゆきや花の春れを
咲くとひそくとひそく
花の月のけくれ本のす
郭の月のけくれ本のす
花の月のけくれ本のす
宗祐
和ふと入曉日東のまほと
宗祐

四

もむくとく書や花の鳥よす
新
さくの候書はうる無事ある
兼載
秋のとおとせりやサト月の夜
宗祐
をあつとほとやうう行ふ
新
時をまことほりしたのす入哉心致
新
もむくとく書や花の鳥よす
全
日
ちゑ行よどむうえん風也
全
晩酌床静石とふのまと竹
全
梅尾とく細川有景也と竹
全

新
高麗の事例さきよしと心致
日もあく小延コシナと仰アキラム全
人ヒトらはおはうとゆく夕タカシ角カツ
新ハタケ候マタタクるをソヨーめ行ハシす即モチ更カタシ
ソヨロもれ有アリせまくね行ハシをうる 家紙カヤヒ
うちれをみせせのりの者ヒトの元ハタケ全
ちくのぬめ衣ハタケがまハタケまのを全
香花ハタケのうみまハタケ即モチか 全
ゆく書ハタケをあは花ハタケの角カツ即モチ水仙スイセン
長谷寺ハタケニのはゆハタケ

桜井中勢至基佐道
水仙

ちくえふ庵上ハタケノタケ宗長
風ハタケや種ハタケくハタケ浪ハタケのハタケ即モチ宗牧
教ハタケあき花ハタケがハタケ新ハタケ河ハタケよ宗頤
ゆん春ハタケう春ハタケ也ハタケもハタケ全
花ハタケうち承ハタケからんとれき香ハタケ兼載ハタケ

春ハタケ

胡ハタケ翁ハタケつハタケあ志ハタケ梢ハタケ角ハタケ賢國
美ハタケとハタケまよハタケあ此ハタケ本ハタケ即モチ兼載ハタケ
あひよハタケ春ハタケのさよハタケひへよ 宗祇

帰ハタケ

君の心もあはれほひ候ましの内
かくゆくるはうみうのむすめ
全
蓋葉

卷之三

まへう精ぬといはへ内董、那
つゝ人董や春の毛くく見
宵拍

卷之三

湖海集

久々に芝生の匂いがする

藤

古

紫身さへや遠役のうちのそれ 行助
氣味それとね波がん行也し 全
神人み絆の業も(氣のも)全
れ神やくととくとくらの免 肩柏
けくちれ世やや歎氣の免 熏戴
連ふまつやよ枝のゆらのま 全
左原の松や岸よりのまふのうを 宗牧
松身氣ちばりかくあらはせ
源ともすらまやびきの氣のも 全

うの能をうしめきむすめ 宗祇

二月也

佐吉法宗

かくもれむよつわう内春 全
あそひくよふよふよふよふの春 肖柏
おもてきのまのわれの實鑑
をとやあそひくよふよふよふの春 友興
森つ一春りやねむ候るの肖柏

雜春題

燕

十五

るなりとゆふむれ燕全

梨

あやまつむ梨の初一より全

春草

ぬくとくにぎ葉代らまふ 心致
恙すゆふ二葉の小松ふ 智蘆
大すかづれのうすい小草す 宗祇

椿

川上れ衣や下砂やい玉桂 全
くわしく代りくらむれ玉桂 全

春月

月暮に遅くとよまれづか
李頃
朧明月はとてぬふりや 宋祇
まひるすゆのとゆく夕月東 宋祇
新月うくやは暮れえつる 肖柏

遅日

水日はふるれ尾のくえくわ 宋祇
花もよゆへそむく春日やふ 全
まのづきをめやうべき春日 鹿 蕙載

遊京

主膳の庵といふ松の下の宗祇
いとぞくとすらの春日宗頃 宋頃
暮春
もう無事にて春やゆくし 心散
ううよ見るよけ やがの春 肖柏
家を春ゆくゆふに連りく後 紅助
例よりよきよきゆくまのとふ 兼哉
春をあてちふ様ありなきゆく 宋祇
うくらうきゆくら新やる春 全
ちてくみ生をうふ行舟 宋砌

衣のを春は躊躇ひてあうる 尚武
有りて春やとゆる不いわ 政光
御行をまことふといれ 熊載
尔く行春のまじめに 全

三善

右

一立翁の後もまことに時多のソトカニ見
けと大男よりゆきゆき御用にてうとうと
拾遺語上
あらゆてうやう名の新郭先生春より

夏

うめれせむ後文 紅葉も出づくらむ
郭云作南庵ひりへと風てもあらじとあら
時よりすとすとひく定無れし先の五月
中より一卯元社若葉牡丹より御用の中
うは延葉が多の後アてとく牡丹へ堀川流
石首より春は野よ知り又新子も葉が次よ
あり明題一枝かくはくとくらひくとおの義高
そ題より堀川院をとくとくとくとくとくとく
ま廿日咲きと名とあらじとくとくとくとくとく
きと風流う新名と申する 月ノトキ友

園山家大政大

王生集中

早ふゆくやくやくみわのとよてせりぬ
久を躰羽衣は春が郊に入るまこと
そ夏のうりりりとて葛蒲のあらす
照へんま苗のやうをやとすゆきとれ
和月あつとすむかとすむとて五百合
名もまうとと月をわゆめくの花野
がえひ侍新哥は名すあり松双絃
さくは今きる白うえー又處のま
はくねはくろのある庵うみ御所は下の
假すや世かは是侍と拂うるあうてはるを

さくはくとまよとととととととととと
内を多るかはくとととととととととと
橋は月とやまとて一蝶堂水鶴をとつて
西月のまつてよき秋をととととととと
氷を六月一日のかよ自然とくや扇納涼
をととととととととととととととととと
泉海春夕風すくちよ中がえーあま夕
鳥ハ喰えりよるとととととととととと
うとあひしよへとせめうとととととと
沖波はゆり定まらる難氣六月下旬よりは

よ細きも、や武川のあ庭園の月を移す
えりや又、枝と葉と落葉花等にて。雪を
日もあらわすは枝の落葉多め也。是
八仲後秋のうきを行ひてや尋ねて
裏參る。

更衣

さくさきを重のゆくね衣ふ 室紙

山姫のもよそりやまうしむ全

卯元

残す雪卯元月もひまく全

卯元小月雪をうつ新紙全
うれしの日よかよくて新紙香爐
詣里を卯元ゆふじつて、無長
あり

じよりそぞろとぞとれ新紙室紙

向日素新紙の相をくわし卯

室紙

卯元

新紙そぞろとぞとれ新紙室紙
まことよそぞろとぞとれ新紙室紙
ちぢりそぞろとぞとれ新紙室紙
ちぢりそぞろとぞとれ新紙室紙
全

あまふあひづくりさん 宗祇
けくさん一元さんゆめうみ 番載
元さんゆめうみゆくら 宿祇
ゆきひたさんと郭 さりぬ
月をきとあはくと家と家を
一あやあしの後のかく 宗祇
ニあやのよそせばほくと全
やくすや月と一ふ郭 さりぬ
金ふきりゆく後

あね多とうかやふ彦作さん全

四

あや

あはくとおはるりやえう
うふもあやうとつねくま 宗祇
みかふとやかふのれのりすま 全

早苗

あはくとおはるりやえう
わやうとおはるりやえう 宗祇

やくす

あはくとおはるりやえう
まやうとおはるりやえう 行助
まやうとおはるりやえう 心致

おまえをなす月をちうどくあそぼう
子日めのとよをとくせきアラム
義載
さくらのやまとおはるのみ尾高
月拍
時子た遼月あすみのれ、う角
末七
五月あハ松そえひよのすはる
宗祇
さうりあひ光の後累用
全

文稿

鶴のからすもすくへうか 肩枝
きもひね拂ひきよのまめ心致

萬葉集 宋紙

四

うと小説を手に持つて、
おもむろにうなづく。おまけに、
うめうめと笑う。おまけに、
うめうめと笑う。

蓮

彦をうながすのと相思
名はぬまことの事とあくま
いのうりあくま

萱艸
アサガホ、アヤリ
トモヒロコ
アサガホ

まつ葉代灯りうしゆく殺 宗祇

あ室

と越政やおらくへお室を下全
みをもよすはお室の多義^{アキ}全

泉

新 よおひく月はうきれ冬をもあひ
ぬきらむとうめいふ水のむくへ宵松
徳林七尾の城^{シマ}
やうもやうもうそれをれをれ松 宗祇
えハ消林をうふふ水のゆ 宗長

下宿毛づり野やソトニ庭のね 宗祇
あくにもしよどよみあひる森 全

蕉和祓

やまとともよすしひ祓河全
ぬ祓河あいやたらねり祓涼全
ものももちかわをこゑよ祓河全

雜文

新樹

新 もおひく葉きこき梢うめ 宗祇
みの枝もくじるよりえ木立 菊蘆

牡丹
根やひじく葉うどつゝ、ねの夏 宗長
手わすとゆやひゆ 牡丹 宗祇
咲きまがう葉のうまつゝ、全

牡丹

三十三

牡丹
春けりぬ花やこゝろのよと季 兼哉
草の名のうすすし花の名 宗祇
美竹

牡丹
むちくね竹もとづらじみえく全
こゝり生とそぞ竹や代との友 全
宗祇季の唐を絶て始ての一生
翁き三世のよきとせきの井 賢威

桺

物をうと使へてくすりあやしむ 宋紙
寝ぬく朝とほりへ擣うる全
下宿しもすりきこまくあらむ全

百合草

薺くじを詠多きよひゆる全
うわれすわすゆめ花の病全

瞿麦

ホ小松生根よ出まする黒ねりあ 智蘆
あ鳥の床反さうれんかうれ 永櫻
かのゆよ根や根よ風よよよ 肖柏

豆豆母けくやソ那うえがくね 宋長
移よま朝血傍一もの病 宋紙
蕎小ちふ軽病とし石せ井 全
常夏小よりてとせ元のたれ 全

赤搗元

ちふや赤搗のとをふの病 全

水鶴

くわふ浦梢はよだのとひる 全

鶴

豆の娘や巻きつて豆うる 宋長

夏月

月細りシテや静ひくとし
明年ノ月はかねも月也即全
花もすと月也や相思爻のを 肩柏
立みぬえいすし夕日東 室紙
立の月は雪化れむるも即全

夕立

夕立は淹夜すとぬ重い心教
ゆきらのま川とて風流る 肩柏
是きぬ風やゆふ立扇の玄 室紙

扇

天は袖うきや扇重き日 肩柏
空は月はくとすより扇う扇 室紙
月とみとあまの風をそよ 室紙

細涼

病氣じぬ極りと涼一射是人教
新 扇をもあ袖をうきの羽もと 宗物
日 付ひくとし扇本の山経れ 番載
扇とるわざやとし扇の色 室紙
ソヨウテ竹や清み柳陰 全

落葉ノ一曲の如小の内 宮城

秋

一立秋の後はほのる候あると人一葉を相柳と
さへてソノキを下しうき乃本葉アリモヘ淮南子一
葉落天下知秋云々立秋の日アリシテ一セタ
昔日是小葉も御とす前又ハ日の暮るはまん
之をもあつや塘川百十木ハ姫女郎花菖蒲紫
萩アリサカニ次第せりたド爰もトク姫を御

秋身仕事有眼あめ風を吹き玉涼をうあたる
也也絹喚友アリ乃ねりとハ勿論新晴晴一叶もな
ふヘ一さくの木ノレシヨウツモ遠近ふる香素
竹とハ他意次第才善秋かと及第くや又本枯は喚秋
初そのありく老葉本枯の神と一色に一葉アリ
帛紙うく仕事有むかづく一姫ハ季元才一葉
ハ主心迷す仕事有むもの候をうつと一
女郎も又媚ぐく風情をうつと一ちども
古來の教訓よきのくとくとちや樓主ノ教訓と
身アリ向くハ解也アリシソキ内季元才也

下草

へ毛筆、薄又紙也。ひきは、紙筋也。至
もくさん紙也。宗祇是文質作也。人には
紙を紙とし、か紙は、紙也。うを紙とし、
諸ふ古事、うがりひとも紙也。うちのえ紙
是等すてんせー、紙蓋の多々ある。ま
生集上うふやのうも入きはるまこと多くもさき
病が下れども、紙の如くに化る。多
くと蘭名をじつべきが、宗祇の後もは
あまくしてゆきる。麻病考。鈴良助。月
宝み葉菊。九月。起。のむ。りさの。古実也。

ちは十日來の月もくふづといぢ。されば、故
のまうは、秋もて、ハサミキリや不治のる
ころま花も面白がえとて、意也。廉は、ま紙づの候
紙小豆え。病考。權日ありて、其物より
病感情海を時言にて、紙廉ひを、而て、まと
あらづ紙を泥とせつて、古字。何て、紙
金葉冬法印光清、
くらむと、のむひくと書と立。人
捨遺冬、
日時あらづ。葛のいせつ。紙廉ひ也
紙等のあらづりあらざる。すてて、お也
病いゆまことに、おもひ、紙の季もまは

其感情深きゆくゆく也初秋よりハ夜を経て朝迄な
くもかとせふかや多カハ初秋旅かほと詫する期
待の立場もよしやが承知事務とはましく、ぬる
ものうりとあ葉ふ書たるはまの秋と是をゆり
軽身に晚るより候ねわく申枚をすくと
次やむる相ては考へれ疾氣乞うとすれど
駆逐の後もいつまゝ人情ゆきと古き日發るすと
うはソシケモ行ふを少や月ハ春の花の極了
致す書きわうく毎日おまきはつくへり
やまはゆく能不可日く夜く仕てをくらうく汝

年より稀うるゆへ也擣衣比叢を度是く侍
出ら秋よりふるゆくみのちくにて候系者へ
ゆくゆくをはれにやく葉日あ九日を
素ふゆくゆくああへ一此ひのう擣衣のみ葉
はせ、八月のやじ樹へ初秋擣衣の事秋くそへ
葛葉思ふ是す是す芦の元箱のものれども小
意もゆく秋の事も争はへ一乞候うるを承
えりあへとあすふ候て書き

秋書

立秋

書寫少ひたうやねのひすれ 宗祇
柳ゆく風り松きうみやこゝ角 全
もと一もくさくうれじう、娘 背松

セタ

^新行まやせすまうれあひこうし心致
竹もとうみぬ星の聲ふり助
引き赤ふ二藍とうとてれ ちへ
き一束一とせふりの衣卦 宗毛
月はすわらあいきふ天の川 背松
空のくわくわくぬ焚天の火 宗祇

支那一葉やうの述ふ林 全

秋

きひはそり、ゆくに林うぐれ 心致
むとゆくもくもすし義の病 背松
錦りをひやくやうく、林のつる 兼敷
をくやんふ天はきかく義の病 宗祇
林うごのうねやくし義の病 宗祇
病うくもくやくやく林う全

高

無分ノ神う霊うき元もんに人致

竹とすく御病うひくあるれ 宗祇
みとすくもよや徳せふ元爲 全
ひふや

起てそんよおやうろや徳せと全

蘭

癡やまうひせとうときれ茶 全
あやむ乳のまを引着くの 肖柏

萩

ま風やつよお姫く萩のめ さく風
ねじせとくまうおを萩のめ 宗祇

三十一

伊セラミカヤロヒ
大木ノ森の風やまはねの香 行脚
る

新
一章身沈やなるくよひの日 肖柏
日 極ちるるるみき川也これ人致
相のまふねそくへきやるのめ 宗祇
麻
麻の多成モリヒヒとやうと經全
ちね音を朝夕房内アヒ卦宗長
立ねふう日小麻帰つ因クス 肖柏

三月

吹じて人病ではよきれのうと 宗祇

亨

下草とよきあじき方すの梢うぬ お頬
滌牛亨ももあく心をか
相亨や浪のよからぬえうえ 宗長
みをきこひき相亨の名残れ 全

相モリれねやうじゆぬれのあ 宗祇

權

もよりはじに相魚のいづれ 宗祐

三十一

宗祇はいに退居

相魚やほそり付くの後 宗長
魚をよそあれの色の相 宗祇
相魚も月うよふの歎 全

月

二井寺ゆゑく

夕日東あともく も本はまか 宗祇
月や秋木のるれのやうれ 宗也
月やもじ葉もくのうれのあ 有相
えくれいソソリあまけ月 宗祇

卷之三

新代よりすわれと秋の月 家紙
えも月、行尸のまゝか全
月ふをきと椎の葉もしきと全
月はりとそしむのうと小 箱蘆
鳥耳數多年とさく月とさく
月よひ日ふやうと邦 れん致

月にしきやまゆれ
老や身の花吹き木ノ木
有柏

日 朝威
多々まことに御の月
月やあらむにまつはるく全
御の月はわざとるかひよん致
日 里もじへらそひのあいが
月 おあきはなきもせ一すれ
をあき月はらそひのあ
月 ひせうへたる法され
自こよもあはめり代の秋
あらま月やうれ成りえ家紙

名とせり人すくすれ秋の月 宗祇

系極意つ華不サク

あまは又うひし秋の月 全

九月ナニ東

ちき名とせりとぬ月の夕也 育柏
杖の木は落葉花葉月よこのり助
月ハナセテ原草の二十九日 墓園
名とせりやくつや二本松の月 無數
玉うあまとせりふ日廿二日 家祖
名とせりやくつひすけの秋宵 宗祇

秋を月すそへとさるる秋 全

虫

名手の連歌

翠萼よりは秋の夜もとよもと全

紅葉

白川の園

空と園ととそと秋の梢もあん段
極とよすとよどくは立枝むちだ
色かようくのとくねことむ智蘆
傳よれうとおのとくとくれ貫徹

麗海ふお高御神秋山か
智盧
子のくやめにほん高紅葉 宗祇
山姫の深きももと高紅葉 畠或
山姫のせりとね枝うさと 栗 宗祇
山姫やも深きそれゆけ全
ゆすきよ深てちとゆくひ巡る 宗長
柳きよよくちうそり下葉 肖柏
あくいはれのくすきタリル 宗祇

菊

あきや西すすきの葉 肖柏

度身もむきやじく喉舌は後方 有頬
又やしんじ究きの枝のまく 宗祇
年長のうふ派やまくせむ 宗祇
弓をまくへまくき枝の葉 全
うろくとお葉やかうる天つ星 全

九月也

秋のりまくとうそく下紅葉 宗祇
風からむかひまくお葉より 宗祇
雑秋歌

初秋

贈のあふふふふき二う角宗祇
三うむれ事むちめうきを全
すううく一筆やあきれ深舟全
別 痴ううねまハ風走一筆ノ那リ船
せと底多キテシテ多病れるか室長
ううそくちよひよひの二筆舟極
金木を引取テミ歎私樂に付多
草をつゝ風と待て一筆れ宗祐

仲元

名うね山茶の宿候川通卧曾盧

小野余連歌

けうを北以上うら山中之那

同明 無門

モ再流とふゆく

林の母は子孫の元の故うれ
萬もとく底のうれふ縫る 宗祐

浪うらあ縫うをよひ林のあ 全

秋夕

むきとうねんあじの夕ふ全

西日のとせむうりの夜ふ全

まちや もの納めとて 宮紙

久

一物の聲の歌の歌をも爲す事無事也と云
色へとて、物事有り上りてすと身へむかひ
きく之れを數ひまゝりと爲る事のうもと
きくもや 井體妙
阿佛尼
宗祇

もや時々薦葉の毎月花をむかふあつき
わざわざひきこもつをとまてと糸をやうとくと
強姦の欲の跡に秋夜にむちと眼あ休め月と
うすかわせ併勢あせ身業れまうほひ紅葉のち
くとおふくろと書ひて秋月のとみへたと
きの其わゆの夙夜有ねて書ひ身業
がんくとえ方にゆけと其感落れぬれ（空艸名
若のわふいソアヌタヌモリキテナリサリシタキ
鄧主翁へ）
たゞみやくわねあひ本草書とゆふ
多きよみ付主翁

え津とふねとせとひる勝の数ひ勿傷とけり名むる
多き事ふか候とて又自らあはとあとをゆ
あぬれどるはとてゆくとて一凍ハ十月半
ハ仕事一地うお畜真馬ふあはめつりしもひゆ
まねきにとあるあがとい室ゆきふ時をすくひ
音ノれつゝたれやれか色ノミミシウトヨ
ノタツキ風情すらえくやまとくほひの
小毎家竹とくまきと白毛一姉をぶんと
うへへへへへへへへへへへへへへへへ
畜地のあやせりとぞれのを
宗砌はらの度々とやまのやはふえはひくま

方へ直れか費を切まはと書致りの所あはれども
おもへるえはくらぬかゆくとて一あは
使へせ切まかよとばはと無駄けり中には観
摸のすうにやけとせん秀逸のあらはうへ見え
えぬとちや自らのとめへ一人の不審がく切
字平へくもかきとみれとゆく御正月がけり
ふへ一寒きの因はるべへ一宮寒へくもとて
承りとては代りとせんがふかゆりとて
おもへくおもふゆきとれとあらは無事年中れど
みや九月あア終へる海竹へ一時 うらりと

かく色をこなせよ梅が東お彼のにさへも匂ひはあ
わへり強き氣をふんと桂の一枚也一岸の
越向あるひいも東北也を本城へまことに春をも
うふ候も一候すもへ

卷之二

うつゆえ柔軟な雨の秋月 宗紙
れの色をぬるりとおもてなし

春林草木の如き全

里到よかるのうへれ神へくき 肖柏
あま下りを候り一次の年幼冬の事よ
やうふとせんへ去年のばあが 宗徳
新まは終定あれせり とこも 人致
日せよ細るをけん時あのせんが 宗紙
さうき時あと年のうくとれ 全
年まもとすき教や月せり と
新せりは月成わま教 时ある 人致
シキシテ まもれ此禁ト おれ
すきとすきあへ とくとく候即 宗長

三十九

霜

心うきえりと重乳の本季ひ
春うきあて多写君寒相日うれ 全
あひくと日やととみのれのね 肖柏
相乳のま葉つととと日氣うる 兼戴

裏

すみうちもあゝもまつらひ重乳
重乳とびくへ葉ひのあゝも 肖柏
あゝきれも玉巻萬代松もる 宗徳

雪

とのとて姉ふハ那のきりあひ
新 畫爲き薪もや残る林のを 人致
新 枝多ふれあき、秋ハ畫サヤハ日
日 行 箭のうと音此ふ汀れ 全
満 く新一因あやましれねの島 全
島 きひへじをそぞる付角も 宗紙
島 きひは多う秋雲の絶えな 有
形 姉は後うめれ島れ又卦 全
島 遠う底うみ行つと原夷れ 全

花うちれもすくとくと高枝葉 宗紙
のとと高う小世の高麗の去 全
高 きよく ひづく り 畫れ松 人致
風雨とひづく ひづく 畫れ草 全
新 姉は歸とひづくや又畫の高 肩松
高 きよく ひづく ひづく 姉はいづく 宗紙
高 きよく ひづく ひづく 姉はいづく 宗紙

吹流川をうねる源那
うね流せ水を行ひ漆川 貢威
はまくろ水海ふみの谷の色 肖柏
河内の浦うらうや爲あ 宗毛
爲あうり見ゆけ、鏡う那 宗祇
めうり引あがへ、纏のと 全
みみ

聲のみす稍す一色あ那 全
夜やもしき多き事石野 長

祚玉

四十一

星の夜とし見る卦 宗祇
うきよせとくわゆる崩卦 肖柏
うきよ東で星を曉ふる卦 宗長

雜文題

麻栗

ちふきのすきよつと高木 宗祐
ねじせひらぬよの時と卦 肖柏
あそぼくとくわゆる卦 宗長
すばらすとくわゆる卦 人致
きとさくちひを説くあまされ 肖柏

ちりちりと紅葉成づる覺りか 宗頤
あはれのちる、紫の御舟舟 宗祇
ももくともちる、身はすくねあ紫舟 全
卦は月の生とれぬる、賀溫
枝はれあしの本がくらの元 宗祐
ソウヒをのよにちる、舟抱

張菊

村を出でて、やがて宿泊する。宋紙
あとも、夜も、のんびりと、のんびりと、全

本林

木にしぬ庵はまちめや種い 全
木被ふとひゑせめや种い 全

雲

あはれ事あるを哀れう那
り附
真ち一度もあらずあらま
家長
彦子消る相のつゝく妻よ
眞國
まことち、三の妻を嫁ふ妻られ
宗祇
夕方といねてくにいと妻うの
宵柏
降ゆる事あるをいと妻
久義

早梅

を嘗やむとくうりれ梅の元
この春をうそとし日仰うわ樹のも全
一花とか候樹乃そうと、^新お
ちゆめとあくみすて樹候をせん
かうや春一も嘗やれうわ樹の元政弘
樹はあいあいあい行くよ
この春のあいえりとよ樹の元全
そくへやはもとへゆく樹の元全
者をゆふたましにし樹はも宵林

墨書き

白書のさよとる年もうる行跡
やじの春もうる年は言宋長
立ててまき林に打年のはま室底
せう春はうつむけ利きと
まことうとくとあらんと年林宋江
年内立春

れまなうやうとくの春 宋江

右文のあとは後波集作れうあを尋ね

あれの形をもととくもとれども、
ノイシタニ川古の御身を仕向むせひの
か又於ノクタニと雜の形トモ、ノク脚書加
ヘ付キ多きハ奇才極よ也とぞうくつゝ
つふとくまアテテ、ノクレヒ也。ノク
書目をの風象をい、ノムシと教作不
内題をやすと妙と平らとゆれども、
字細一筆の筆走り、但大墨ノ内に耳
にあふる音速とももとくと並ぶ羅音の
うれづや

古今著書、繁則苦蕪、雜、約則病不贍、
若宋牧法師擇善集、採擷精要、議論
簡易、ノク謂連社巨寶矣、得月樓主人嘗
藏其先考手摸古本、而又得德大寺内府公
及宋牧子宋養真蹟、且ノク校讐言、章編三絕、
精備明悉、以校剖劂其意俾學者者咸知

其片言有體、而隻句有法、則主人惠後生、
豈淺哉。余與主人結髮相知、唱酬路熟、
其於此舉、惟無所謂、余將言也。

文化丙子花朝 東嶽樵夫司直撰



